

●ガザの街ではイスラエルによるハマスの討伐のための本格的な地上戦が始まり、この戦いによって子ども達の死者数が 3700 人を超えたと報道されています。常に戦争は罪のない人々の命を奪います。「そんな理不尽な事が起こるから神など信じられない」という声はいつの時代にもあります。そのような言葉に対してキリスト教はどのような言葉を持つのでしょうか？

●米国軍の従軍カメラマンで、戦後広島・長崎で写真を撮られたジョー・オダネルさんは戦後 30 年の時を経て、あの無差別に人を殺した原爆投下は間違いだったというメッセージと共に戦後の長崎で撮影した子ども達の写真を世界に発信されました。そのきっかけとなったのは原爆被害者の写真が体に貼りつけられたキリスト像でした。そこには「罪も無く殺されたイエス様は、あの原爆で無念に死んでいった犠牲者と共にある」という信仰が込められていたのです。

●今日の聖書箇所には「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは信じるものが皆…永遠の命を得るためである。」とあります。

「モーセの上げた蛇」というのは、その昔、荒野で神に不平を述べたイスラエルの民達に炎の蛇が神から送られ、それによって苦しんでいたところ、神が「青銅の蛇」を旗ざおに架けるよう命じられ、それを仰ぐと人々の命が助かった、という民数記 21 章のお話を指しています。

十字架に上げられたイエス様の姿は木に架けられた蛇の様に呪われた様な醜い姿でした。そのような神の子の姿が世に示された事で、「どうして私が？」と苦しみあえぐ人間に慰めが与えられ、無惨な死をとげられたイエス様が復活されたことによって「死で全てが終わりではない」という希望が示されたことを聖書は告げているのです。

●オダネルさんは、ご自身も被爆の苦しみを抱えながらも、主を信じ、同じ被爆者に寄り添い励まし生きられました。理不尽な苦しみを経験し苦しんだ者たちが、キリストの愛に触れて再び力を取り戻し誰かを励ましていく、それは主の十字架のもたらす奇跡です。苦しみの中で、主の十字架の愛に触れ、この苦しみがいつかだれかの命を救う力に変えられていくことを信じて、共に歩んでいきたいと願います。

